

埼玉大学文化科学研究科修士課程学位論文・特定課題研究成果要旨

研究専攻（専門領域）		日本・アジア研究専攻（日本語学）		学籍番号	06CS021
氏名	安 周連	ローマ字	AN JUYEON	国籍 (留学生)	韓国
修士学位 論文名 特定課題研究名	韓国の日本語教科書における多義語の意味記述の問題点 —多義動詞「かける」の意味分析を通じた正しい語彙学習法の提案—				
提出年月日	2008年1月10日		指導教員	山中 信彦	
体裁 (論文)	111頁(1頁文字数1280字)		言語	日本語 (韓国語含む)	
別冊添付資料等	二種教科書の全体語彙 37頁				
キーワード	多義動詞 単義動詞 多義度 認知意味論 現象素				
<p>本稿は近年、急速な日本語学習ブームと学習者の増加による日本語教育への関心の中で、特に 80 年代以降から重要性に対する認識が高くなり始めた語彙部分の教育に注目する。語彙の中でも主体の動作と存在する状態・発生を叙述し、文章の中での機能と役割が多様である動詞の意味面の教育に焦点を当てて、韓国の場合、この動詞の意味面の教育がどのようになされているか調べてみる。そのため、まず、第 2 章では教材分析を通じて、全体語彙の中で動詞がどの位の比重で分布するのか、品詞別語彙分布度を調査した後、動詞だけをまた 3 つの国語辞典を基準にした多義度を基に、多義動詞・多義性が高い動詞・単義性が高い動詞・単義動詞という 4 つの分類に分ける。多義度というのは、意味面の編集方針がそれぞれ異なる 3 つの国語辞典を基準に、例えば、辞典の意味分類が大・中・小の 3 つに分かれている場合、中分類が 2 つ以上になっていると多義動詞として判定し、1 点を付けるなど、ある一定の基準を 3 つの辞典に同じく適用させ、3 つの辞典の合計を計算した数値のことである。実際の調査を通じた 4 つの動詞分類の中で、多義動詞の比率が圧倒的に高いということが分かった。その後、この多義動詞が教科書の中でどのように記述されているかという多義語の記述の実態とその問題点を探ってみることにする。教科書の中で高い比重を占め、その構造の複雑多岐によって学習が困難である多義語の正しい教育法は言語教育の中で極めて重要な部分であると言えるが、今までは語彙部分の教育が等閑視されて来たこともあり、教科書の語義記述の中で大きな問題点が見られた。従って、教材分析を通じて得られた多義語の意味記述の問題点を踏まえ、第 3 章では認知意味論の観点をつえ、多義動詞「かける」を case study として、その意味分析を行う。この認知意味論の観点での多義語の捉え方の有効性というのは、学習者にとってこれまでバラバラに存在した数多い多義的意味を 1 つの大きなまとまりとして捉えさせることができ、効果的な第 2 言語学習への橋渡しのステップの提示ということであろう。意味分析を行う前は「かける」の先行研究を検討し、先行研究から得られた課題を基に本稿の方向性を定めることにする。最後の第 4 章では第 3 章の「かける」の意味分析の結果に基づいて、実際、教育への理想的な指導法を模索することにする。即ち、認知意味論での多義語の意味拡張のルートはある共通の認識を基に原形意味から比喩的リンクによって多数の周辺意味に拡張することであるので、教師は多義語指導において多義語の数多い意味の間の関連性に重点を置き、原義から周辺義へと包括的で、分かりやすく指導することに心掛けなければならない。第 5 章の今後の課題は本稿で扱わなかった自動詞「かかる」との考察にしておきたい。</p>					